〈研究短報〉

地域における障害者支援のための ボランティア養成に関する課題

—— ボランティアを通した大学地域連携の可能性 ——

北野庸子*1・岡　　茂*1

Key words：ボランティア、障害者支援、大学と地域の連携

1．はじめに

ボランティア活動は、現代社会における社会参加のひとつの形態であり、阪神淡路大震災以降、その社会的役割への期待は高まっている。また少子高齢化の中で「団塊世代」がボランティアをとおして地域の人間関係を再構築する実践例も紹介されている。一方、障害児・者の教育や支援は「脱施設化」の方針がますます顕著で、通常教育環境の中で教育を受ける障害をもつ子どもや、地域で暮らす障害者数は増加している。しかしこのような障害者のニーズと地域住民のボランティアへの関心とが連携されていない現状があり、この点における大学の役割が期待される。

2．目　的

地域に暮らす障害者へのボランティアに関する地域住民の意識調査と、ボランティア参加を促進するための大学の役割を明らかにする。

3．調査対象

東海大学（湘南校舎、伊勢原校舎）を中心として、その近隣の市町村に暮らす人々を調査対象とした。対象者の選択は、社会福祉協議会に関係するボランティア団体や地域のボランティア活動に参加している住民を通して本調査への参加を依頼した。

4．調査方法および調査内容

調査期間は2007年９月～2008年１月まで。

5．結果および考察

①対象者の属性：対象者の総数は170名（男性33名、女性137名）。年齢は50～60代が最も多く平均年齢は56歳。居住地は、平塚市（45％）、伊勢原市（24％）で湘南校舎、伊勢原校舎近隣に居住する人々だった。

②ボランティア経験：対象者の半数はボランティアを経験していて、経験の有無と男女差には有意な相関は見られなかった。最も多い経験としは、高齢関係で、他の障害（視覚、聴覚、肢体、精神）のボランティア経験者は少なかった。ボランティア経験をすることで「人や人生の見方が変わった」「障害をもつ人の手伝いができて嬉しかった」という感想が多く、問題点としては「支援するための専門的知識や技術が足りない」等の指摘が多かった。

③ボランティアへの参加の可能性：60％以上の対象者はボランティア参加を希望したが「有償ボランティア」になると希望者は有意に減少した。希望するボランティアとしては、高齢関係が多いが、他領域（聴覚、視覚、肢体、精神他）への関心も見られた。ボランティアに参加できるのは、週に１日～２日、時間帯は午前（９時～正午）、午後（正午～３時）。通所の時間は15分～30分以内が多く、曜日の希望に関しては傾向が見られなかった。

④大学でのボランティア講座への参加の可能性：講座の内容次第で参加を決めるという回答を加えると80％以上の対象者が講座への参加を希望した。講座開催の頻度は、週１回～月１回、講座の時間は２時間以内。受講を希望する内容は、高齢者では介護、うつや老人性難聴などのコミュニケーション問題、食事と運動、知的障害関係では障害者施設の手伝いの仕方、聴覚障害関係では要約筆記や手話、視覚障害関係では点字やコミュニケーションの仕方、運動障害関係では車いす介助などの希望が多かった。

＊1　東海大学健康科学部社会福祉学科

地域と大学の連携に関しては、大学から福祉関係の広報をしてほしい、ボランティア講座と公開授業を希望、駅周辺に大学と地域連携の情報・ 研修センターをつくる、学内にボランティアの拠点を、出前講座、大学の聴講希望、大学が地域で見えないので接点が欲しい、大学から若い活力を高齢化する地域に欲しい等。今後、地域におけるボランティア活動の拡大、充実のためには知識、技術をもったボランティアの養成と同時に、ボランティアの連携拠点としての大学の役割を考えていく必要がある。